

# 「満洲国」における言語接触 ——新資料に見られる言語接触の実態——

張 守 祥

## 論文要旨

かつて日本の実質的な支配地であった「満洲国」における日中両民族間の言語接触を対象とした研究は今日までほとんど存在しない。当時の言語接触の実態はどのようなものだったのか。また、それはどのような特徴を持っていたのか。これらは不明な部分が多く、言語接触の観点からも非常に興味深い課題である。本研究では、軍事郵便絵葉書を資料として、「満洲国」の接触言語の使用状況、語彙、音韻、文法のジャンル毎に考察し、満洲国における言語接触の実態と特徴を明らかにしようとするものである。考察した結果、語彙の引用、人称代名詞を中心とする「デー」の拡大使用、音韻上の変化特徴、助動詞としてのアル、助詞、準体助詞、形式名詞の省略など、ピジンの特徴に当てはまるものもあれば、当てはまらないものもある。21世紀になった現在、「満洲国」時代の経験者の多くは他界している。この意味で、本研究は当時の言語接触の一側面を把握するには役立つものだろう。

**キーワード**【満洲国、言語接触、ピジン、中国語、日本語】

## 1. はじめに

20世紀前半（1932年3月～1945年8月）、中国の東北地方にはかつての日本関東軍によって作られた傀儡国家である「満洲国」が存在していた。この「国家」は成立から最後まで国体を闡明する憲法も制定されずに、国際法上も合法性が欠けているので、中国国内では党派、政治信条を問わず、現在に至るまで「偽満洲国」と呼ばれ続けている。

「満洲国」が存在中、数多くの日本軍人、官吏、日本人社員、満蒙開拓団などのメンバーは現地に駐屯、生活し「満洲国」の軍事、政治、経済を握っていたが、彼らは中国人社会から完全に孤立して生活していたのではなく、日々の生活を送るには多かれ少なかれ現地人との意思疎通は避けられなかったことと考えられる。もちろん、彼らの中には現地語を使った人もいたし、現地人の中には日本語を第二言語として使った人もいたと予測できるが、お互いにどのような言語形式をもって交流を維持したのか。当時、中間言語やピジンと言えるような言語現象が発生したかどうか。謎の部分が極めて多く、言語接触の観点からも非常に興味深い課題である。

しかし、戦後66年間、「満洲国」当時の言語接触状況を扱った研究は殆どなかった。その

原因としては以下のことが挙げられる。まず、これまでは中日両国の研究者はそれぞれの心理でこの段階の歴史については触れたくなかったし、または触れられたくなかった。一方、最近の動向であるが、「満洲国」の言語接触について研究する必要性があると認識していながら、関連データが見付からずに諦めた人が多い。

本研究は新しく発見した日本人と現地中国人との交流場面を描いた軍事郵便絵葉書を言語資料として位置づけ、かつての「満洲国」における話し言葉の言語接触にはどのような特徴があるかについて考察・分析したい。

## 2. 「満洲国」の言語事情

中国東北地方への日本人の進出は20世紀初頭の日露戦争後のことであったが、当初は主に南満洲の関東州の大連から長春までの南満洲鉄道沿線の各都市の鉄道付属地に集中していた。日本語教育も「満洲国」建国前に関東州、満鉄付属地内の各レベルの学校で展開されていた。しかし、「満洲国」発足後、日本国内からの農業移民をはじめとする渡満人口が年々増えて、敗戦当時は既に(『満蒙終戦史』(1962)による)合計166万人に達していたとされる。

「九一八事変」後、中国東北地方を占領した関東軍は日本の利権を最大限に確保し、また世界中の非難を避けるために、当初「満洲国」の学校教育に日本語を導入せず、しばらくは中華民国の教育制度をそのまま援用せざるをえなかった。学校教育では中国語と日本語が併用され、小学校で日本語の授業が始まったのは1934年であり、三年生以上の児童に週に2コマを実施した。したがって、同時期の中国語、英語と比べて、むしろ日本語は劣勢的な地位にあった。しかし、1938年1月の新学制改革に基き、中国語(当時は「中国語」のことを「満洲語」または「満語」としながら、満洲民族の固有言語を「固有満洲語」として区別した)、日本語、蒙古語が「満洲国」国語と定められた。

学校教育では三言語の内の二言語を勉強すべきだとの規定があったが、中国語、蒙古語のどちらを選んでも、選択肢の中には必ず日本語が入る。しかも、日本語の授業は一年生から必修科目になり、週に8コマあるいは10コマまで増加し、中国語授業の時間数の2倍となった。つまり、この時期から学校教育では日本語は既に中国語以上の地位を有するようになった。

丸山(1942)によると、1936年から「満洲国」民生部の「語学検定試験」も日本語普及の推進策として注目された。第一回と第二回は主として官吏のみを対象に実施されたが、第三回から一般市民に対しても行われるようになった。最初(1936年)の満洲国語学検定試験には5,492人が受験し、その内の日本語受験者は3,607人であったが、第6回(1941年)には39,769人が受験し、その内の日本語受験者は31,369人まで増加していた。合格者に対し

て、特別な優遇制度（特等・一等・二等・三等の四段階に分けられ）をもって奨励した。つまり勤務先で合格者を採用する場合、それぞれの日本語等級に応じて、「語学手当」を支給しなければならなかった。他には満鉄のような大手企業、政府官庁も独自の語学検定制度があった。一方、1938年から採用された官吏登用制度では、官吏採用前に選抜試験もあり、受験者は中国語、日本語、蒙古語またロシア語の中から、自分の母語以外の一言語を受験科目としなければならなかった。

現地支配の安定化が進み、「満洲国」をより日本化する為、制度上では日本語の地位を引き上げる新しい措置が次から次へと打ち出された。「満洲国」政府公報を例にとれば、最初の段階では中国語は正文、日本語は訳文だったが、1936年以後は同等な地位となる。その後、日本語は正文となり、中国語は訳文であると決められた。「満洲国」の官吏には満鉄付属学校で日本語を身に付けた人が多く、殊に、高級官僚に日本留学経験者が多数いたので、日本語は官庁用語としても使われていた。このように、「満洲国」の三大国語に位置づけられた日本語の地位が持続的に向上しつつ、国家生活においては他言語に優越する「指導力」を持っていたとも言える。

また「満洲国」の現地住民の日本語運用の地域差についても、丸山（1942）は「大連や旅順の満系は日本語がよく分かり、奉天に来ると日本語の分かる満系が少しく減じ、新京へ来るとかなり減じ、ハルビンへ行くと著しく減ずる。況んや北満の田舎へ行けば日本語を知っている中年以上の満系はほとんど見当たらないほどである」と述べている。

以上、「満洲国」における日本語教育の持続的な推進、国語としての日本語地位の逐時的な向上、日本語学習奨励制度の実施、「満洲国」各地域に分布している日本人人口数の増加に伴い、同じ地域で異なる言語をもつ中日両民族の言語接触は避けようにも避けられない環境にあった。更に日本語教育の地域的な不均衡という要因もあり、旧満洲軍事郵便絵葉書における言語接触データの形成、多様化にも繋がっていたと考えられる。

### 3. 先行研究

先行研究を概観する前に、「協和語」及びピジンとは何かについて確認しておく必要がある。「協和語」とは「満洲国」当時、中日語話者のコミュニケーション活動で発生した語彙レベル、音韻レベル、文法レベル上の混合現象の全般を指していた言葉である。一方、現在では「協和語」についての認識はさまざまである。戦時中の文献史料には「協和語」という用語は用いられていないため、「協和語」という用語自体は曖昧不定な概念で、「満洲国」当時のものではなく後世にあらわれた表現であるとする主張（安田1995）もある一方で、「満洲国」の国語の一つであった日本語が各民族語の上に立つ言語として「協和語」と称されていたとする主張（三谷1996）もある。しかし、当時の文献に記載のないことは「協和語」

が「満洲国」の実際の支配者である日本側の容認を得ていないことを示すものであるが、その存在自体を否定できるわけではない。また、何の変化も伴わない日本語そのものは「協和語」であるとは考えない。

ピジンとは異なる言語の話者が意思疎通を成立させるために、限られた語彙や単純化された音韻体系・文法構造を特徴とする複数の言語の混合体である。ロング (2010) は、言語接触論の主流の考え方に沿って、狭義のピジンが形成されるには、少なくとも三つ以上の言語が接触していなければならないとしている。またピジンの三つの特徴については、次のように概括している。

- (a) 縮小化 (貧弱化とも言う) : 語彙の数、文法的形態素の数、スタイルの数が減る。
- (b) 混交化 (干渉とも言う) : 基層母語から発音、文法、意味論的要素が転移される。成人の第二言語習得の特徴が現れる。
- (c) 簡素化 (simplification) : 不規則的要素 (不規則動詞など) の削除、重複する要素 (名詞・形容詞の性や数の一致) の削除、透明性の高い「分析的要素」の増加が見られる。

また、大橋・ロング (2011) では接触言語が発生するかどうかを決める要因としては、学校教育の有無、現地の言語の数、統治期間の長さなどを考慮しなければならないとしている。そのなかで、戦時中の日本軍によって占領された地域で言語接触が発生した可能性が高いが、それに関する資料はきわめて少なく、旧満洲国で日本人住民と現地人との間に行われた接触言語の会話例が残されているが、その接触言語の実態や使用状況は把握されていないとも述べている。

これまでに言語接触の研究事例は主に欧米諸語を基盤としたピジン・クレオールが取り上げられ、日本語が視野に入れられたことは少なかった。カイザー (2005) は、開港時代の横浜では日本語を基盤とした双方向のピジン (簡略化された文法項目・日本語語彙がメイン) が存在したことを確認し、外国人と日本人との接触場面では、日本人も外国人に合わせるような形で横浜ダイアレクト (英語などのピジン化・日本語化した語彙、日本語を英語風に発音したものなどの混合体) と思われる言葉を常時駆使していたとしている。杉本 (2010) はカイザー同様、開港時の資料を用い、横浜の英語系のピジンでは、日本語語彙のローマ字化、擬音語、擬態語の多用、助詞のほとんどが脱落していると述べている。

一方、「満洲国」の言語事情に触れた研究は著しく少なく数本しかない。管見の限り、「満洲国」の話し言葉を中心とする言語接触についての学術的な研究は皆無状態に近い。丸山 (1942) は現地観察で「満洲国」における国語としての日本語の地位、日本語普及状況の地域差に触れたうえで、街頭での日系官吏の奥さんと満系商売人との会話が日中語混合形式だったと指摘している。

安藤 (1988) は「兵隊日本語」における最大の特徴は性的罵言が多いとしている。石 (2003) は「満洲国」における語彙レベル、文法レベルの日中語混合現象を「協和語」と名

づけ、一種のピジン言語であると主張しているが、先行研究からの使用例<sup>1)</sup>が主であり、言語的特徴に関する例証は十分とは言えない。

石田(2002)は「満洲国」時代の文学者古丁氏の短編小説「原野」のテキストを用いて「協和語」の有無を確認したが、調査対象が量的に不足で、「協和語」の特徴を正確に見出せなかった。大久保(2010)は更に調査範囲を広げて「満洲国」中国語文学者25名44篇の作品を考察した結果、作家によって違いはあるが、日本語語彙の借用は普遍的な現象で、借用範囲は名詞に留まらず、感動詞、擬声語まで及んでいると指摘すると同時に、直接的に文学作品から「協和語」という語彙の使用証拠<sup>2)</sup>を発見し、「満洲国」の中国語話者の間でも「協和語」という言い方が既に幅広く知られていたことを裏付けている。

日本人植物学者—中尾佐助<sup>3)</sup>(1990,p247)は、自ら経験した「協和語」の形態について次のように述べている。「私が経験した合成語にはもう一つ、「協和語」とよばれた言葉がある。戦前、戦中に満洲、華北などに大量の日本の民間人や兵隊が入り、中国人といろいろ交渉があった。そこで日本人が使ったのは協和語とよばれた変な言葉だった。日本人は中国語のつもりで使い、あちらは日本語として聞いた言葉である。文法と語彙はだいたい中国語だが、発音はカナ書きの発音である。(中略)日本の奥さん連中は買い物も協和語でやって用を足していた。私もそうだった。正則の中国語から見ると滑稽な協和語であるのに、それが意外にも相互によく通ずるのであった。」このように、中尾佐助という言語学専門ではない日本人が当時の言語使用状況を振り返って、「協和語」について語っていることから、この言葉が満洲国当時の日本語話者の間でも使われていたと考えられる。

#### 4. 資料の概要

本研究でデータとして用いた資料はすべて筆者が所持している戦時中の旧日本軍で流通していた軍事郵便絵葉書の原物であり、作者名は明記されないのがほとんどである。戦後66年以上経過しているので、著作権の期限が切れている。これらの絵葉書は「満洲国」時代の言語景観関連データの収集段階で、日本の古本屋、大型絵葉書専門店のポケットブックスなどから入手したものである。

軍事郵便とは第二次世界大戦中に戦地にいる軍人が日本へ、或いは日本から戦地の軍人に向けて私信を送るための郵便制度である。通常、無料で枚数の制限はあるが、軍事行動などに係る文書は含まないことになっていた。軍内部の検閲上の理由で、郵便物自体は封筒を使わない検閲可能な葉書が多用され、軍事郵便葉書と呼ばれていた。当時の従軍画家を中心に描かれた軍事郵便絵葉書には、山水画、漫画、戦争画などが取り入れられ、特に軍事教育、言語教育、国威高揚の宣伝手段としてよく用いられていた。

一方、これらの絵葉書は「満洲国」時代の軍隊生活、現地人との交流場面(食生活、買物、

学習、遊樂、理髪、乗車、交通整備など)を描写しているだけでなく、登場人物の会話内容も文字化して記述されているのである。絵葉書の宛名面の切手を貼る位置には「軍事郵便」と書いてあり、その下には「陸軍省恤兵部発行」など発行機関に関する文字記載もある。更に、一部使用済みのものには「検閲印」と日付などの情報もある。資料の信憑性については確保されていると考えている。

芸術は天から落ちるものではなく、生活から来るものである。生活原型がなければ、芸術家にも創作のインスピレーションは現われない。軍事郵便絵葉書(漫画)の創作も芸術活動の一分野として、現実生活の事例から創作素材を吸収し、多少の誇張または変形的な処理があったとしても、現実生活からさほどかけ離れたものではない。

これらの軍事郵便絵葉書(漫画)は合計104枚で、絵葉書にあるテキストの形式に応じて、以下の4種類に分けた。「満洲カナ表記<sup>4)</sup>の中国語+日本語訳」(24枚 写真1参照)、「日本語による会話文+満洲カナ表記の中国語語彙リスト」(32枚 写真2参照)、「日本語による会話文+中国語訳付き」(41枚 写真3参照)、「日本語のみによる会話文」(7枚 写真4参照)である。現段階ではこれらの資料は今までに先行研究の少ない「満洲国」における中日両言語の話し言葉の接触事象を裏付ける唯一の証拠として、きわめて貴重な価値を持っている。

一方、絵葉書の描写画面は「満洲国」に留まらずにそれ以外の地域(華北地方、華東地方)のものもある。換言すれば、中日語話者間の言語接触は遥かに「満洲国」を超えて他の

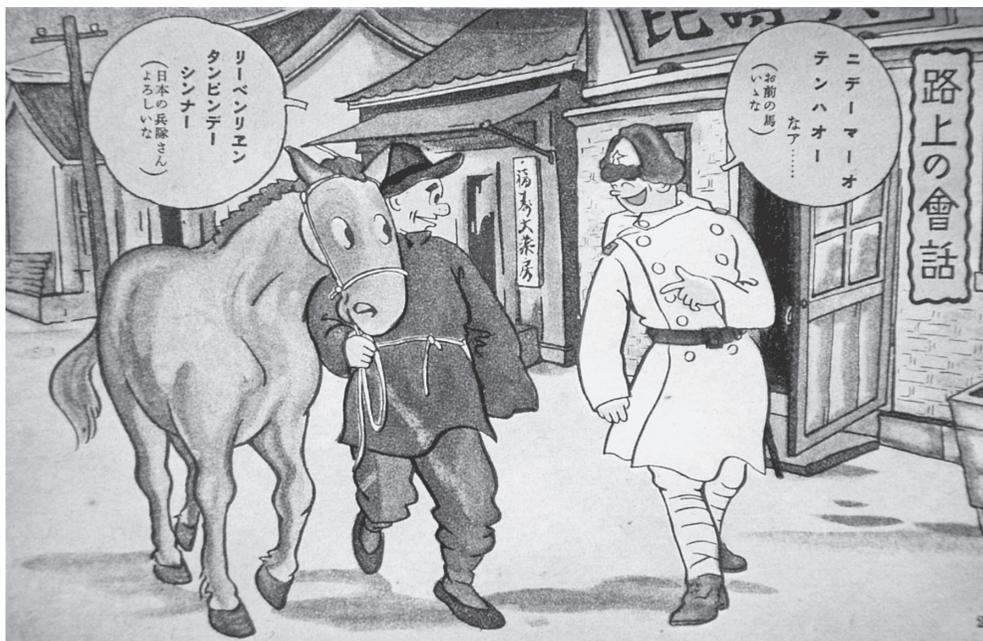


写真1 路上の會話(満洲カナ表記の中国語+日本語訳の使用例)





写真4 日本武士道（日本語のみによる会話文）

占領地域にも及んでいたとも言える。なお、写真2と写真4で示しているように、日本語と現地語入りの絵葉書（漫画）は語学教科書としての目的があるとともに、「満洲国」あるいは中国各地の社会事情（一輪車、苦力、木挽き）風俗文化（高足踊り、街頭理髪、客棧）などを日本本土へ伝えるといった目的もあったと考えられる。

## 5. 考察

以下では「満洲国」言語接触の顕著な特徴を見てみよう。具体的に言えば、言語接触形式の多様性、語彙レベルの借用、「デー」の拡大使用、文法的な特徴を中心に考察してみることとする。例文はすべて筆者の収集した軍事郵便絵葉書にある会話のテキストからとったものである。

### 5.1 「満洲国」における言語接触形式の多様性

戦時中の「満洲国」における言語接触は、ただ日本人と現地人との間で発生した現象だけでなく、予想できる範囲では少なくとも以下の8パターンがあると考えられる。しかし、本研究のデータ内では(6)(7)(8)に関する使用例はなく、(4)に関するものは1例しかない。

- (1) 中国人→日本人 (2) 日本人→日本人  
 (3) 日本人→中国人 (4) 日本人→外国人  
 (5) 中国人→中国人 (6) 外国人→日本人  
 (7) 中国人→外国人 (8) 外国人→中国人

さらに、話者の年齢、民族属性、職業などの影響もあるとみえて、データとしての会話の中身は均質的なものではなく、個人差の極めて大きなものである。換言すればこの時期の言語接触には複数の形式があるとも言える。下記の例文①～⑤をみても分かるように、語彙レベルの借用、日本語語順の中国語、日本語助詞の過剰省略、日本語文と中国語文の混合使用など、言語接触は様々なレベルで発生している。

① 「一輪車」(日本兵同士の会話)

日本兵：帆をかけた小<sup>シアオチエー</sup>車は日本では見られないなア……

② 「皇軍の仁慈」(現地人と日本兵)

現地人：ニッポン兵隊サン人情ある。支那兵隊プーホープーホー。(不好不好)

③ 「日満親善」(日本兵と満洲国兵)

日本兵：ニーライイーホイバ (一度遊びに来給へ)。

満洲国兵：シイエシイエ。

④ 「兵隊と農民」

日本兵：ニデーエンチュワールシンヂヨ。(お前にタバコをやろう)

農民：タアータアデーヨーシイエシイエ。(どうも何卒何卒有難う)

⑤ (陣中理髪)

現地人：ワタシバリカンヨク切レマシエン。

例文①は二人の日本兵が歩行中、日本にはない帆をかけた押し車を見て発した感慨である。日本語の文構造に現地語語彙(小車)をそのまま借用している。例文②は現地住民の日本語で、「の」とか「が」のような助詞の使用がなく、しかも後半の述語は句レベルの「良くない」の代わりに現地語の「プーホープーホー(不好不好)」を取り入れているが、日本語の接尾語「さん」の敬称作用についても理解されているようで、「日本兵隊」の後ろに「さん」が付いているが、「支那兵隊」の後には使われていない。また例文③も④もいずれも「満洲カナ」表記の中国語会話文である。例文③にある日本語訳を参考にすれば、この仮名表記の中国語(ニーライイーホイバ)は「你来一回吧<sup>5)</sup>!(一度遊びに来給え)」であり、不自然な文である。それにもかかわらず、場面、前後の文脈があるので、意味を理解する上、より正確な判断ができるわけである。例文④は日本兵が現地の農民に煙草を勧めている場面である。「満洲カナ」表記の中国語会話文を原文どおりに整理すれば、日本兵：你的烟抽我進上、農民：「大大地吹谢谢」となり、日本兵の中国語はその語順が日本語的で、文末述語にはサ変動詞語幹の「進上」をそのまま借用していながら、語尾変化は伴わない。一方、この農民の

回答文は日本人風の中国語で答えている。例文⑤では現地人—理髮屋さんの日本語文には使用すべき格助詞「の」も「係助詞」の「は」もすべて抜けており、「ません」の発音も「マシエン」と変わっている。

## 5.2 語彙の借用や文レベルの中国語使用

語彙レベルの借用においては、日本語話者が日本語を話す際に現地語彙を取り込む場合があるし、中国語を話す際に日本語語彙を取り込む場合もある。反面、中国語話者は中国語、日本語を使う際にも同じ借用を発生させている。なお、語彙の借用量をみれば、中国人と比べて、むしろ日本兵の使用する日本語には中国語語彙、文レベルの借用がより積極的に行われたと考えられる。

例文⑥～⑩に示されているように、日本語話者を中心に、日本語の文法構造を保ちながら、語彙レベルで大量に中国語の名詞類（「洋車」<sup>ヤンチエー</sup>「馬車」<sup>マーチエー</sup>「啤酒」<sup>ビーチウ</sup>「猪」<sup>チュ</sup>「老酒」<sup>ローチユー</sup>「中国菜」<sup>チュンクオツァイ</sup>「河」<sup>ホー</sup>「大頭魚」<sup>タートウユイ</sup>「洋楼」<sup>ヤンロー</sup>「カイスイ（開水）」など、形容詞類の「巧」<sup>チアオ</sup>「好看」<sup>ハオカン</sup>や動詞類の「カンカン→看々」などを借用し日本語語彙に代替している。一方、例文④では中国語話者の日本語には、中国語感動詞の「アイヤ（哎呀）」<sup>6)</sup>を取り入れている。

### ⑥（洋車）

日本兵：この洋車<sup>ヤンチエー</sup>は馬車<sup>マーチエー</sup>よりはやいなア。

### ⑦（食堂）

日本兵1：おい、啤酒<sup>ビーチウ</sup>を飲めよ。

日本兵2：ウヘッ 猪<sup>チュ</sup>の丸煮とはおどろいた。

### ⑧（外出）

日本兵1：久しぶりで老酒<sup>ローチユー</sup>でも一杯やろうか。

日本兵2：さあ・・・中国菜<sup>チュンクオツァイ</sup>でも喰べに行こうか。

### ⑨（太公望）

日本兵：この河<sup>ホー</sup>でなにがとれるんだ。

魚釣り人：へへ。大頭魚<sup>タートウユイ</sup>が釣れますよ。

### ⑩（郵便）

日本兵：郵便局<sup>ユービンチユーツァイナール</sup>在那兒？（郵便局はどこですか）

現地学童：あの洋館<sup>ヤンローウ</sup>のとなりあるよ・・・

例文⑩では日本兵が中国語で郵便局の所在を尋ねているが、現地児童が日本語で答えている。面白いことに、二人とも各自の話の中に母語語彙を借用している。日本兵の中国語には日本語の「郵便局」を借用していながら、発音の方は中国語化している。現地児童の日本語には「洋館」のつもりで、現地語の「ヤンローウ→洋楼」をそのまま取り入れている。一方、日本兵が中国語の形容詞を借用する際には、形容動詞として扱っているようである。例文⑪

と⑫にある「巧」<sup>チアオ</sup>「好看」<sup>ハオカン</sup>を形容動詞の終止形活用とみなしているが、例文⑬「理髪師」にある「好看」<sup>ハオカン</sup>に「やってくれよ」は明らかに形容動詞連用形の活用であると思われる。

⑪ (スケッチ)

日本兵：なかなか巧<sup>チアオ</sup>だねエ。

⑫ (高足躰)

日本兵：とても好看<sup>ハオカン</sup>だなア。(とてもきれいだなア)

⑬ (理髪)

日本兵：おい、好看<sup>ハオカン</sup>にやってくれよ。(きれいにやってくれよ)

現地人理髪師：明白<sup>ミンバイ</sup>。(分かりました)

⑭ (急用)

現地人：アイヤ、大変だ。

⑮ (外出)

日本兵1：ニデーどこへ行くんだ？(お前どこへ行くんだ?)

日本兵2：オデー活動でもカンカン(看々)しようと思ふ。(俺は活動でも見てこようと思う)

なお、例文⑯では語彙レベルの借用から一歩進んで、文レベルの使用にまで発展している。「ラオラマーラ」(落了馬了→動詞+動態助詞+名詞+文末語気助詞)は中国語の時制では既に日本語の「馬から落ちてしまった(あるいは落馬してしまった)」という意味を十分に示しているにもかかわらず、本来の意味を縮小し、ただ一個のサ変動詞の語幹として扱い、更に「する」の過去形「した」の使用を加え、二重構造の過去形文になっている。

⑯ (馬場)

日本兵：おヤツ・・・(馬から落ちた)ラオラマーラしたな。

### 5.3 音韻上の特徴

上記の例文内の語彙及び句の発音は、カナ表記によって現代中国語の原音に接近するように、かなりの工夫がなされていたと言える。しかし、「満洲カナ」(写真5参照)による中国語語彙の発音を表記することには限界があり、一対一の関係にはならない。というのも無理やり表記しても、四声の変化は示すことができないので、多くの単語は程度の差こそあってもやはり本来の発音から乖離する。例えば「洋車」(yang che) → (ヤンチェー)、「馬車」(ma che) → (マーチェー)、「開水」(kaishui) → (カイスイ)、「啤酒」(pi jiu) → (ピーチウ)、「猪」(zhu) → (チユ)、「落了馬了」(luo le ma le) → 「ラオラマーラ」へと変容している。



写真5 食堂

#### 5.4 人称代名詞を中心とする「デー」の拡大使用

「我」(wo)と「你」(ni)はそれぞれ現代中国語の一、二人称代名詞で、「デー」(的)は所属関係を示す助詞であり、一人称と二人称の後に使えば、ほぼ日本語の「わたしの」「あなたの」に相当する言い方になる。一方、特に所有、所属関係を強調する気持ちがなければ、中国人はその「的」を省略することが普通である。

しかし、資料として使用する軍事郵便絵葉書において会話文の主語としての中国語一人称、二人称代名詞の多数には誤用が観察される。簡単に言えば日本人が中国語一人称の「オ(我)」、二人称の「ニ(你)」を主語として会話文に取り込む際には、「デー」を入れて中国語一人称、二人称代名詞の不可分の一部として扱っている。例文⑰にある「ニデー背中」は日本語の「あなたの背中」という意味なので特に問題がないが、その他の例文⑮、⑱にある「ニデー一緒に〜」「オデーリュウソイ」はいずれも主語としての誤用例である。また、例文⑳にある「ニデーのは〜」と「オデーのは〜」の使用は更にその認識を一步発展させて「デー」と「の」の二重使用まで進化している。本研究ではこのような「デー」の誤用を「デー」の拡大使用と呼ぶことにする。

なぜ当時の日本人が中国語の一、二人称代名詞を主語として使う際、「デー」の拡大使用が多発していたのか。それは現代日本語の人称代名詞の音節構造によるところが大きいかと考えられる。日本語の単音節語彙数は少なく、人称代名詞は基本的に二音節、三音節であるのに対して、中国語語彙は単音節が多く、しかも人称代名詞自体はすべて単音節である。単音

節語彙の使用に馴染まない日本人話者が中国語の「我 (wo)」と「你 (ni)」を日本語または中国語文に導入する際に、音節数の安定感を保つために、無意識に「デー」が使われたのではないかと考えられる。

⑰ (入浴)

日本兵1: 今日の(風呂)カイスイ(とてもいい)テンハオーなア。(今日の湯加減はちょうどいいなあ)

日本兵2: (お前)ニデー背中流そうか・・・(お前の背中を流そうか)

日本兵3: あゝ(ありがとうありがとう)シイエシイエ。

⑱ (記念撮影)

日本兵: ニデー一緒に写真撮るから(早く来いよ)クワイクワイデーライライ。

⑲ (満人の子供)

日本兵: ニデーチイソイ(お前は何歳だ?)

満人の子供: オデーリュースイ(あたい六つだよ)

⑳ (靴直し)

日本兵A: (お前)ニデーのは修繕したか。

日本兵B: (自分)オデーのはもうお先に(完了)ワンラーだよ。

靴屋さん: (分かりました。有難う)トントンデンシェーシェー。

「デー」の拡大使用は人称代名詞に留まらず、それ以外の形容詞、副詞にまで拡大されていた。それぞれ例文⑱⑲⑳にある「クワイクワイデ(快々地)」「トントンデ(统统地)」「タアータアデー(大大地)」「<sup>ツオンミンデ</sup>聰明的」はまさにその使用例である。日本人話者の間で生み出された「デー」の拡大使用は、現地人にも大きな影響を与えているようである。戦後66年も経過した現在でも、中国の東北地方で時々ジョークとして「デー」の拡大使用の表現を聞くことができる<sup>7)</sup>。

㉑ (慰問袋)

日本兵A: おいお前達(いるかいらないか)ヤオーファーヤオー?

日本兵B: とんでもない(沢山もらひたいよ)タアータアデーヤオー。

㉒ (親善)

日本兵: ハハ・・・お前は<sup>ツオンミンデ</sup>聰明的だな。

## 5.5 助動詞としての「アル」

本来「ある」は日本語では存在という意味を表す五段動詞であるが、軍事郵便絵葉書においては、「ある」をもって助動詞(「である」「です」「だ」の三つ)を一本化する特徴が極めて顕著である。確かに現在の日本人だと、中国人風の日本語の真似をするとき、「今日暖かいあるよ」「この弁当美味しいある」のような表現を想起しやすいようであるが、類似の現

象は150年前の横浜開港時代の文献にも現われていた(カイザー 2005参照)。本研究ではこのような助動詞「である」「です」「だ」の作用に代替する「～アル」付の話し方だけを「助動詞としてのアル」と命名することにする。一方、金水(2003)は横浜居留地で発生した言語接触を起源としている外国人(特に中国人)の「話し方」の全般(主に戦後の漫画中のセリフ)を「アルヨコトバ」としているが、本研究では中国人のこの話し方全体に対する意識(固定観念)ではなく、「満洲国」当時の中日語話者間の話し言葉の誤用形式に注目する。金水の枠組みだけでは本研究に現われている様々な言語接触の形式には対応できないため、あえて採用しないことにする。

「助動詞としてのアル」の使用頻度が高く、中国語話者である現地人の使用例がもっとも多いが、日本語話者がまったく使わないわけではない。日本兵同士間でも使うし、また現地人の話しぶりに合わせて使うこともある。例文⑳では、三人の日本兵の露天芝居の内容についての会話で、文中に使われている「べけある」は横浜ピジンにもある言い方である(カイザー 2005)。例文㉑は日本兵と粟飯を炊いている少女との対話で、日本兵の質問文も少女の回答文も「ある調」を使っている。例文㉒では煙草売りの現地人からの「助動詞としてのアル」の質問文に合わせて日本兵も同じ口調で返答している。

㉓ (露天芝居)

日本兵1:あのセリフが分かるかい。

日本兵2:ぜんぜんわからん。

日本兵3:ありやね・・・わたし国昔この張飛見たい強い豪傑あつた。

今支那兵隊一人も強いもの居ないべけある。(べけである)

㉔ (少女と語る)

日本兵:娘それ何するあるか。(しているのですか)

少女:粟飯(は)美味ある。(美味である)

㉕ (煙草売り)

現地人:二十銭安いあるか。(ですか)

日本兵:うわ!高いあるな。(ですな)

一方、現地人の「助動詞としてのアル」の使用もバリエーションに富んでおり、断定助動詞の意味だけでなく、形容詞、形容動詞の丁寧体は基本的に「ある」の一本化にまとめている。以下の例文㉖～㉘における「ある」は三つとも断定助動詞「である」類に代替しているとも認定できる。一方、例文㉙の先頭にある「不思議ある」と文末にある「同じある」は文末助動詞「だ」または「である」類の代替使用であると考えられる。例文㉚の後半の「略奪しないアル」は「～しないのである」という意味の使用ではないかと考えられる。

㉖ (鯉のヒゲ)

現地人:コレ鯉ある(這是鯉魚)。(これは鯉です)

⑳ (復興)

現地人：安民楽居！これもみんな日本兵隊さんお蔭あるツ。(お蔭です)

㉑ (理髪)

現地人：日本兵隊サン、ガマン強イコトアル。(我慢強いことです)

㉒ (鯉のヒゲ)

現地人：ほう・・・日本鯉ヒゲあるか不思議あるな。(不思議だな)・・・この鯉丁度支那兵士と同じある。(同じである)

㉓ (歩武堂々皇軍入城)

現地人：日本兵隊サン来ルモウ大丈夫アル。(大丈夫である)  
日本兵隊サン略奪シナイアル。(しないのである)

㉔ (街頭理髪)

理髪師：旦那終わったあるよ。眼醒ますよろしい。(終わったのだよ)

一方、データ内の使用例全数に目を通して、「ある体」の文法上の使用特徴は次の五点にまとめられる。

- (a) 繫辞：名詞＋ある
- (b) 述語：(形容詞・動詞) 基本形＋ある
- (c) 述語：形容動詞語幹＋ある
- (d) 述語：動詞未然形＋助動詞(ない)＋ある
- (e) 述語：動詞連用形＋助動詞(た)＋ある

## 5.6 助詞、準体助詞、形式名詞などの省略

助詞省略の用例がデータの所々に溢れているのに比べて、準体助詞、形式名詞の省略例はさほど多くない。用例㉑の回答文は確かに日本兵の口から発した内容であったが、それはむしろ現地人の口調を真似た構文とも考えられる。文中省略された格助詞などを全部補足すると、「わたし(の)国(に)昔この張飛見たい(な)強い豪傑(が)あつた。今、支那兵隊(に)一人も強いもの(は)居ない・・・」となっている。また例文㉒では二か所(格助詞の「の」と係助詞の「は」)、㉓では格助詞など四か所(が、を、が、を(は))が省略されている。そのうち、所有格を示す格助詞の「の」と係助詞の「は」の省略頻度は他より一段と高い。

㉕ (陣中理髪)

現地人：日本兵隊サン・・・ワタシ(の)バリカン(は)ヨク切レマシエン。

㉖ (牛の買い入れ)

日本兵：牛四頭だな。豚はないか。

現地人：豚(が)隠してある。支那軍へ賣る金(を)誤魔化す豚(が)あること(「を」

または「は」知らせない。

また、例文③④では接続助詞の「と」を省略しただけでなく、文末表現の一部である「のではないか」も「ないか」へと簡略化している。例文③⑤では接続助詞「ても」の一部の「て」が抜けている。最後に、例文③⑦～③⑧は日本語としては成り立たない構文であり、文中に欠けているのは述語表現である動詞文を名詞化する役割を担う「準体助詞」または「形式名詞」の存在である。即ち現地人が次の「～するのが～」「～する方が～」「～することが～」といった複数の構文形式を「動詞基本形+よろしい」に一本化している。本研究ではそれを「ヨロシイ調」と呼ぶことにする。

③④ (馬車)

日本兵：フルスピードでやってくれよ。

現地人：余り走る（と）お客様車から落ちる（のでは）ないか。ワハハ。

③⑤ (日本武士道)

現地人：モウ避難シナク（テ）モ大丈夫ヨ。

③⑥ (鯉のヒゲ)

現地人：安く負ける。試し斬りする（のが・ほうが・ことが）よろしい。

③⑦ (洋車)

現地人児童：日本兵隊さん、〇〇まで二十せん（銭）高い・・・

十せん（銭）にまけさす（のが・ほうが・ことが）よろしい。

③⑧ (牛にたわむれ)

現地人児童：兵隊さん曲芸仲々うまい。今度は逆立する（のが・ほうが・ことが）よろしい。

## 6. まとめ

以上、限られた軍事郵便絵葉書を資料として、「満洲国」時代の接触言語の使用状況について分析・考察を行った。人称代名詞を中心とする「デーの拡大使用」、音韻上の変化特徴はピジンの特徴の一つである「混合化」に一致している。また、「助動詞としてのアル」と「ヨロシイ」は両方とも複数の構文形式を一本化するのは、ピジンの特徴の「簡素化」に当てはまる。一方、語彙レベルの借用もピジンの特徴かと思われるが、考察した結果、借用語彙の種類が多く、名詞だけに留まらず、副詞、動詞、形容詞、感動詞にも及び、更に文レベルの借用にまで発展しており、量的には少量とは言えない。これは従来のピジンの定義で主張されてきた「限られた語彙」という特性には当てはまらないようである。

現段階では推測の域を出ないが、これらの絵葉書に見られる言語接触の様々な側面はおそらく、これまでに先行研究に登場した「協和語」という現象であると思われる。ただし、先

行研究では「協和語」という記述があったとしても、その言語構造に関する詳細な記述や分析はほとんど無かった。したがって、本稿において具体的な言語データを提示し、それを基にした実証的研究を進めたことは相応の意義を持ちうる。しかし、絵葉書に現れているさまざまな接触言語の実例が「ピジン」の一般の定義に当てはまるかどうかについての検討は十分ではなく、このことに焦点をあてて、東アジア言語を対象としたピジンの特性について引き続き研究してみたい。

### 参考文献

- 安藤彦太郎 (1988) 『中国語と近代日本』 岩波新書
- 市之瀬敦 (2007) 「言語接触からクレオール語へ」『月刊言語』 36-9 pp16-23 大修館書店
- 石田卓生 (2002) 「『満洲国』 文學に於ける所謂「協和語」とその考察方法の検討——古丁「原野」を例にして」『愛知論叢』 (72) pp1-17 愛知大学大学院院生協議会
- 大橋理枝・ダニエル・ロング (2011) 『日本語からたどる文化』 放送大学教材 pp171-181 放送大学教育振興会・NHK 出版
- カイザー・シュテファン (1998) 「Yokohama Dialect—日本語ベースのピジン」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』 pp83-106 汲古書院
- シュテファン・カイザー (2005) Exercises in the hama Dialect と横浜ダイアレクト 『日本語の研究』 1-1 pp35-49 日本語学会
- 川見駒太郎 (1942) 「台湾において使用される国語の複雑性——附、方言の発生——」『日本語』 2 卷 3 号 pp32-39
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
- 杉本豊久 (2010) 明治維新の日英言語接触—横浜の英語系ピジン日本語 (1) —成城大学大学院研究科 英文学研究紀要【No42】 pp357-381
- 丸山林平和 (1942) 「『満洲国』に於ける日本語」『国語文化講座第 6 卷』 pp134 朝日新聞社
- 満蒙同胞援護会 『満蒙終戦史』 (1962) pp441 河出新房新社
- 三谷裕美 (1996) 「『満洲国』における『国語政策』:『新学制』にみる『国家』と『国語』像」『東京女子大学紀要論集』 46-2 pp99-115
- 中尾佐助 (1990) 『分類の発想 思考のルールをつくる』朝日選書 409 pp247-248 朝日新聞社
- 大久保明男 (2010) 「『満洲国』中国語作家の言語環境と文学テキストにおける言語使用」『帝国主義と文学』 pp202-235 研文出版
- ロング・ダニエル (2010) 「言語接触から見たウチナーヤマトウグチの分類」『人文学報』 428 号、1-30
- 石 剛 (2003) 『植民地支配と日本語—台湾、満洲国大陸占領地における言語政策』 pp74-75 三元社
- 安田敏朗 (1995) 「『満洲国』の『国語』政策 (上)」『しにか』 6-10 pp84-91 大修館書店
- 安田敏朗 (1995) 「『満洲国』の『国語』政策 (下)」『しにか』 6-11 pp92-99 大修館書店
- 安田敏朗 (1997) 『帝国日本の言語編成』 pp8-9 世織書房

## 注

- 1) (丸山1942) ①「ニーデ、トーフト、イーヤンデ、ショーショー、カタイカタイ、メーユー?」; ②「ニーデ、ヂヤガ、ダイコン、ナカ、トンネル、ターター、ユーデ、プーシンナ」とある。
- 2) 小松氏の「鑛山旅館」『藝文志』(後期)第8号、1944.6には、「麼西麼西你叫大烟嗎?突然的、是一個青年人的口音、協和語」という文がある。
- 3) 中尾佐助(1916~1993)愛知県豊川市出身の植物学者。大阪府立大学名誉教授。専門は遺伝育種学、栽培植物学。ヒマラヤ山麓から中国西南部を経て西日本に至る「照葉樹林帯」における文化的共通性に着目した「照葉樹林文化論」を提唱している。昭和18~20年にかけて、「満洲国」軍小興安嶺調査隊、蒙古善隣協会西北研究所など経験。
- 4) 「満洲カナ」とは何かについて、安田(1993)によれば、「満洲国」で行われた、当時の「満洲語」つまり中国語を日本の片仮名で表記しようという試みで、識字率の向上をはかるとともに、仮名文字化によって日本語の単語が直接中国語の中に浸透していくことを期待していたとしている。
- 5) 中国東北地方では日本語の「一度遊びに来給え」のような言い方を現地語の「来玩儿啊」に言い換えている。
- 6) 「哎呀」または「啊呀」とは中国語では物事に驚いたり、意外なことに気がついたりしたときに発する言葉である。
- 7) 筆者の故郷—黒龍江省では、旧植民地時代言語生活の深刻な影響から、日本式の中国語のステレオタイプが観察される。例えば、多くの高年層の人から「你的良心大大地不好」(訳文:きみの良心は非常に悪い)「你的良心坏了坏了地」(君の良心は悪くなったね)「我的回家、你的干活」(訳文:オレは帰る。君は働け。)'你的什么的干活」(訳文:君は何をしている)「統々の不行」(訳文:全部だめ)などの表現を聞いたことがある。

## 付記

本稿は、日本語学会2011年度春季大会(神戸大学)における口頭発表の内容に加筆・修正を行ったものである。席上では先生各位から有益なコメントを賜った。心より御礼を申し上げる。

## ENGLISH SUMMARY

### Language contact in “Manchukoku”: The actual situation of the language contact based on some newly discovered materials

ZHANG Shou Xiang

There has been very little research on language contact between Japanese and Chinese in Manchukoku (Manchukuo) while it was under Japanese rule. How did language contact occur? What were the characteristics of the contact? Many issues still remain unanswered. This paper examines the language contact and its characteristics by analyzing the vocabularies, phonetic features and grammar items used in military postcards. The language use of the postcards show certain features of a pidgin such as over use of the postposition ‘de’ [‘de’ in Chinese] after personal pronouns, an ‘aru’ style of auxiliary verbs, omissions of particles and semi-particles. Considering the fact that the number of the people who experienced the period of “Manchukoku” are getting fewer and fewer, it can be concluded that this paper has truly provided crucial clues which are meaningful in understanding the language contact situation during that period.

*Key Words:* Manchukuo, Language Contact, Pidgin, Chinese, Japanese